

藤本伊三郎記念 がん登録学術奨励賞 受賞講演

歯科医師からみたがん登録

KOYAMA Shihoko

小山 史穂子

名古屋市立大学大学院医学研究科
地域医療連携推進学

2026年6月に米子市で開催された第35回日本がん登録協議会学術集会にて、身に余る光栄ながら「藤本伊三郎記念がん登録学術奨励賞」を頂戴いたしました。本賞の重みを深く噛みしめるとともに、これまでご指導いただいた多くの皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

■研究の背景：臨床現場に資するエビデンスを求めて

口腔は、摂食、嚥下、発話といった、人間の尊厳と社会生活を支える重要な機能を担っています。歯科領域の疫学はむし歯（う蝕）や歯周病が主流であり、口腔外科では臨床・治療が重視されてきました。一方で、がん統計において口腔がんは「希少がん」に分類されるため、従来は「頭頸部がん」等に一括りにされ、単独の実態が見えにくい現状があります。しかし、口腔は歯科医師が日常的に視診・触診を行う部位であり、最初にごんを発見するのは医師よりも歯科医師であるケースが非常に多いのです。歯科医師が必要とする口腔がんの資料を構築すること、それが私の研究の出発点でした。

■実態の可視化：地域登録から全国登録へ

まず、大阪府の地域がん登録（2000-2014年）を用いた分析では、年齢調整罹患率が2.1から3.8へと有意に増加している実態を明らかにしました（Oral Oncol. 2020）。その後、全国がん登録（2016-2019年）を用いた口腔扁平上皮癌（OSCC）の全貌解明では、2019年の年齢調整罹患率が5.12に達し、地域格差（標準化罹患比0.77-1.37）が存在することを可視化。予後に関しては、1年生存率が全体で83.5%である一方、進行度が限局的の94.5%に対し、遠隔転移では32.1%と劇的に低下していることが明らかになりました（JMA J. 2026）。

■予後規定因子の検討：治療体制と生活習慣の両輪

次に、予後を左右する要因を多角的に検討しました。医療提供側の要因である頭頸部がんの“Hospital Volume（施設症例数）”の解析では、症例数が多い施設に比べ、少ない施設では死亡リスクが有意に約1.2倍高いことがわかりました（Jpn J Clin

Oncol. 2021）。

患者側の要因である飲酒習慣については、口腔・咽頭がんの患者を分析し、診断時の多量飲酒（1日2回以上）が10年後の死亡リスクを男性で1.26倍、女性で2.62倍高める強力な「予後因子」であることを示しました（Cancer Epidemiol. 2024）。

■社会的影響：コロナ禍とメディア報道がもたらした動態

社会情勢が診療現場に与えた影響も分析しました。COVID-19パンデミック下では、2020年5月の緊急事態宣言時に口腔がんの初回治療患者数が前年比で約30%激減しましたが、一方で診断から手術開始までの待機期間には有意に短縮されており、有事における医療現場の強靱な適応が確認されました（Oral Dis. 2023）。著名人による口腔がん罹患公表の際にも顕著な変化が認められました。報道直後に口腔がんの診断数が急増し、特に進行度が限局的の診断数が目立って増加したことは、メディア報道が早期発見を後押しする強力な契機となったことを示唆しています（Oral Dis. 2025）。

■結びに代えて

これらの研究は、臨床や行政にある課題を研究の種とし、各がん登録の特性を活かしてデータを使用し、形となりました。今後も皆様の支えに感謝しながら、がん登録データの更なる活用と歯科口腔保健の向上に邁進してまいります。

